

木の文化と物質循環

京都大学環境科学センター
センター長 酒井 伸一



2013 年は、伊勢神宮の 20 年毎に行われる式年遷宮、60 年ぶりとなる出雲大社の大遷宮が大きな話題となった。社殿や御装束などを新しく作り直し、敷地内で社殿を移動・再生させる伊勢神宮の式年遷宮の営みは、690 年にはじまり 20 年毎に 1300 年余にわたって続けられている。遷宮のための多くの諸行事が厳粛に執り行われる姿が伝えられた。式年遷宮に要する費用は 500 億円以上とのこと、国を挙げての公の儀式であった時代もあるが、今は国民の浄財で賄われているとのことである。その一方、おはらい町という門前町は時代とともに姿を変えている様子であり、この 20 年の移り変わりは非常に大きいと聞いた。

宗教要素や経済要素にも社会の関心は向けられようが、加えて遷宮がもつ一つの姿は、木の文化、森の文化を伝承する物質循環の姿でもある。社殿の建物の新旧交代に使われた新材は、ヒノキで約 1.2 万本とされる。そのヒノキは、今回は伊勢の植林材が 700 年ぶりに用いられているとのこと、そして旧材は宇治橋の鳥居などに再利用されているとのこと、見事な物質循環である。循環的視点からみれば、さまざまな素材や食材の自給が図られているとのことと特筆すべき点である。神事に用いる御塩は、近くの塩田で海水を煮詰めて作られている。そして、こうしたさまざまな技の継承、営みに関わる人の継承が図られていることではじめて、さまざまな物質循環が図られているともいえる。20 年ごとに繰り返す、そのインターバルも絶妙の間隔のように思えてくる。人の一生では式年遷宮に関わることができるのは、せいぜい 3 度、その貴重な 1 回の経験の機会に出会ったことを嬉しく思う。

循環型社会形成や廃棄物管理を主たる研究課題としているが、身近にこうした文化があることに純粋に感謝しなければならないように思える。加えて、新たな発見や視点を大切にする研究教育においても継承すべき点は、しっかりと継承しなければならないと再認識しているところである。物質循環の継承には、資源、技術、財政、社会などのさまざまな要素の関わりではじめてなしえることは、具体的な循環への取り組みの中で痛感している。何より重要なことは物質循環の道が途絶えたものや技術も多いことに心を配らねばならない時代である。2000 年の循環基本法をはじめ、この四半世紀にわたる様々な物質循環への試みが、より確かな形に進化し、継承されていくことを願っている。